

# ヤマイヌ考くヤマイヌ〓オオカミという常識を疑う

狼と森の研究所

朝倉 裕

## 一. はじめに

かつて日本にいたオオカミはどんな動物だったのか、という疑問は人々の興味をかきたててきました。古い文献や伝承に登場する「ヤマイヌ」がオオカミの別名であるかどうかは古くから議論を呼びましたが、今やそれを誰も疑おうとしません。たとえば宮崎駿監督の名作アニメ「もののけ姫」の少女サンは終始「ヤマイヌの姫」と呼ばれますが、観客は彼女を育てたモロと二頭の兄弟を、疑いなくオオカミと解釈して作品を楽しんでいます。ヤマイヌ〓オオカミであることはすでに議論の必要はないと考えられているのかもしれませんが。

でも本当のところはどうなのでしょう。昔はそれを考えるための材料が民俗学的な資料と、限られた標本と形を照らし合わせる形態的分類しか研究手段がありませんでした。

今はオオカミという動物そのものの野外研究が進み、「オオカミとはどのような動物であるか」の判断材料が豊富にある時代です。研究が始まったのは一九三〇年代ですが、急速に進み、今ではその生態や生息環境が最も研究されている動物になりました。

従来ニホンオオカミの姿を探るために民俗学的な手法がとられてきましたが、民俗学は人間の古い時代の文化を掘り起こすものであり、収集した説話、伝承を採集し、それらを相互に比較し、忠実に古の人々の意識や感情を探り、それを帰納することで人間の文化の全体像を明らかにするという柳田國男以来の実証的な方法が採られています。そのままの方法で古い時代の、今は日本列島には生存していない生身の動物の姿を明らかにすることはできません。

オオカミに関する科学的な知識を前提に置いて、まずは文献を吟味し、ヤマイヌ〓狼という常識の元を探っていくことにします。

## 二. 民俗学的アプローチから提示されるオオカミの姿

菱川晶子「狼の民俗学 人獣交渉史の研究」(東京大学出版会二〇〇九)は、狼に関する文献、民話、伝承を網羅している労作です。昔話や伝説の中に語られている狼や狼に関わる様々な民俗を採集し、人間の目に映ったオオカミ、日本の歴史の中での人間と狼の関係を知らするために文化のフィルターを通して検証することを目指した研究で、菱川はあとがきに「昔語りの中にだけ生きていると考えていた狼は、人々の生活や信仰の中にもしっかりと根を張り生き続けていた」と記しています。オオカミ〓ヤマイヌというイメージの由来を網羅しているため、日本文化の中のオオカミ(すなわちヤマイヌ)の姿を知るには恰好の書です。菱川の記述を追って、オオカミと当時の人々が山犬をどのように捉えていたかを探ってい

きます。

## ○二つの呼称

狼の名称は鎌倉時代すでに大神と山神という呼び分けがあり、それが後の山犬という呼び名になり、ヤマイヌはオオカミの別称だと書かれている文書があります。以下、その後の各時代の記述を抜き出します。

### (室町時代)

日本人の手による「温故知新書」には「豺狼」に「サイロウのオオカミ」とルビがふられ、どちらも同じ動物とみなされていました。ポルトガル語の辞書「日葡辞書」には「オオカメ」「ザイロウ」「ヤマイヌ」の三項目があり、同一のものとして扱われています。

### (江戸時代)

江戸時代に入って発展した本草学では、豺(サイ)と山犬は同一の動物を指して使用され、豺(山犬)と狼は異なる動物であると考えられていたようです。

本草学の図譜にある狼の説明にはこう書かれていました。

「狼と豺はよく似てはいるが異なるものであり、豺は多く狼はまれである」「足が短く尻が円いのが狼で、足が高く身が痩せているのが豺である」

「本朝食鑑」(一六九五年人見必大)には「豺」を山犬と呼び、狼とは違う動物だが混称されることもあると書かれています。「和漢三才図会」(一七二二年寺島良安)も同様です。また尾張藩の地誌として江戸時代中期に編まれた「張州雑誌」には豺と狼は似ていても同じ生き物ではないと記されています。

その他いくつもの文献が豺狼の文字を使って狼とは異なる動物「豺」を山犬ヤマイヌと記しています。

しかし一方で、「珍禽奇獸図」という細川家文庫に伝わる図譜には、オオカミはヤマイヌと併記され、ヤマイヌがオオカミの別称とみなされている例もありました。

菱川は江戸時代の名称問題を「本草学の隆盛とともに「豺」と結びつき、狼とは異なる存在として認知されるようになっていた。しかし、両者はすべての人々に厳密に区別されていたわけではなかった。」「狼と豺(ヤマイヌ)は異なる生き物とされながら、時に混称もされていたようである。山犬が狼であった年月の長さを考えれば当然のことかもしれない。また文字を解する知識層と、一般庶民の間の二層化現象が生じていた可能性も十分に考えられる」

と見解を述べています。ちよつと意味のわからないところもありますが、ここからは菱川の中には山犬⇨狼という先入観が支配的であり、本草学の家元である中国の影響で「豺」という架空の動物の存在が日本に持ち込まれたと解釈していることがわかります。

### (明治〜昭和時代)

明治に入るとまず江戸時代から続く本草学者の最後の一人田中芳男が選定した動物図鑑

「動物訓蒙」(一八七五年)に「ヤマイヌ」が掲載されています。「山中に棲み小動物を食べ、犬に似てそれよりも大きい」と説明があり、WOLF、CANIS HODOPHILAXとも書かれ、他に「オオカミ」の項目はないので、田中はヤマイヌを日本のオオカミの呼称としていていることがわかります。

次に登場するのは「動物辞典」(大正四年・一九一五年)です。東大生物学科の最初の卒業生である飯島魁監修の、アメリカから輸入された生物学による最初の日本の辞典です。そこには「ヤマイヌ」の項目だけがあり、山犬が日本のオオカミの呼称で両者は同一のものだとされています。この時すでにオオカミはほぼ絶滅し、日本の生物学はまだ大型動物の野外研究ができる段階まで達していませんでした。

時代は昭和三年(一九五二)まで飛び、同年刊行の「動物の事典」は「オオカミ」は世界各地のオオカミと比較し、ヤマイヌは「江戸時代までいたとされるかなり大形のオオカミの呼称」と、別の動物とも同種ともとれるよう表現されています。

菱川の著作に書かれたヤマイヌ説を要約すれば、鎌倉時代から江戸時代直前まではヤマイヌはオオカミを表すものでしたが、江戸時代に盛んになった本草学は「狼」のほかに「豺」という別種の動物を想定していました。明治になりアメリカから動物学が輸入される頃にはヤマイヌがオオカミだとされるようになります。

### ○名称に関する考察

次に各地方に残るオオカミの名称と毛色に関する話題を見てみましょう。多くは菱川が二層化したと評したうちの下層の社会に流布してきた伝承の類で、当時の各地方の人たちがヤマイヌとオオカミを呼び分けていたという例です。この「毛色の違い」は、当時の人々の観察の記録であり、その呼び名をもった生き物がどのような動物だったか、オオカミであったかどうかを現代から判断する手がかりの一つとも言えます。

江戸時代の「享保・元文諸国産物帳」の中の名称の分布を検討すると「狼」が最も多く、次いで「やまいぬ」があり、さらに「豺」や「山犬」「山狗」「山の犬」「大犬」といった表記が含まれ、分布としては「狼」が全国的に広がり、「やまいぬ」は福島以西の全国、「山の犬」は本州中部に、「大犬」は北陸地方に集中しています。

さらに菱川は、明治以降に刊行された民俗誌、民間説話集から狼の名称を抽出し、「狼」「ヤマイヌ」「オイヌ」「オオカメ」「オーイン」「大犬」など多数のバリエーションの分布状況を調べ、その地域性について言及しています。

「狼」は全国的にほぼ均等にみられ、「山犬」も岩手県から大分県までの広がりを見せている。しかし山犬には分布上の偏りが若干あり、山梨県、長野県、四国地方に多い傾向がみられる。逆に近畿地方や北陸、中国、九州地方では山犬は少なくなり、「狼」が名称の主流になる。紀伊半島南部には「オウサン」系の名称もある。「オイヌ」は東北地方に多くみられ、「オイヌ様」になると東海地方まで広がっている。「カセギ」は東北地方に限定され、「オー

イン」は日本海側を中心にした名称である」

「山犬」系の名称にやや偏りがあるのは、地域的な事情が反映しているのかもしれない。それも手掛かりの一つと言えそうです。菱川は「両者（山犬と狼）はすべての人に区別されていたわけではなかった」で済ませていますが、境界があいまいで誤認することはあっても、「ヤマイヌ」と「狼」は見た目に明らかな違いがあつて地域それぞれに人々は区別していた結果だとも考えられます。

### ○毛色の違い

また、毛色についての菱川が収集した文献資料には次のよう表記がありました。まず本草学の書籍からの引用です。

- ・狼 おほかみ 多く灰色なり、しろ、まだらの外なし（葛飾北斎「絵手本『画本彩色通』」
  - ・狼 その色は雑黄黒色かまたは蒼灰色である（「本朝食鑑」獸畜部）
  - ・狼 色は雑黄黒、または蒼灰色のものもある（「和漢三才図絵」）
  - ・狼 全身茶褐色にして微紅を帯び、頬に小白斑点あり（「本草綱目啓蒙」）
  - ・豺 全身黄褐色なる者多し。また虎斑なるも、多色なるもあり（「本草綱目啓蒙」）
  - ・豺 犬に似ていてすこぶる白い。毛は黄褐色で（「和漢三才図絵」）
  - ・黒狼 （図譜「本草図説」高木春山）
- 伝承については、現代になって収集されたものも含まれています。
- ・毛は煙草の灰のような薄黒い灰色（奈良県東吉野村聞き書き）
  - ・灰粕色の犬（「吉野風土記」）
  - ・家の前に虎毛の犬が一匹いた（「秋田マタギ聞書」）
  - ・南部（岩手県）の焼砂で狼二匹と遭ったことがあるが、それはゴマ犬のような毛色をしていた（「秋田マタギ聞書」）
  - ・屋間瀬臺野で黒と白の斑のある狼に出会ったそうだ（岩手県水沢市「町の民俗」）
  - ・山犬は黒と白のまだらの犬で（愛媛県美川村「美川の民俗」）
  - ・灰粕色をした狼（奈良県吉野郡川上村「吉野風土記」）
  - ・狼の毛色は灰粕色である（奈良県吉野郡大塔村「吉野風土記」）
  - ・山犬の毛色は、地犬（柴犬）の毛色と大差ないがどうかすると虎毛というのがいた。虎毛とは、黒と赤とが混じりあつた色のことである（長野県三峰川谷「狩りの語り部―伊那の山峡より」）

少し薄茶と思われる毛色の犬のような毛物が下り（奈良県吉野郡十津川村「吉野風土記」）  
こうした毛色が、実際に目撃されたものだとしたら、多くは「犬」であると考えてよいものです。現代のオオカミ研究で観察されているハイイロオオカミは家族群で生活し、毛色は父と母のものを受け継いで同系色になり、地域的にも後述の石黒がDNA分析の結果で示しているように同系統のオオカミが日本列島に生息していたと推測されていますから、地域的にも同系色になるはずですし、実際に観察されているオオカミにはここに見るような

毛色のバリエーションはありません。

菱川は当時の人たちがオオカミをどのような存在としてとらえていたかを整理し、特徴として、狼と犬の類似性、狼と山の関係、野生動物のなかで最も強い存在であること、狼を神あるいは神使として認識していること、と四つを挙げています。そのうち山と関係する存在としての狼を表した「新編常陸国誌」（明治三二年、一八九九）の以下の解説、

「ヤマイヌ」狼を云う、即山犬の謂なり、又オホカメとも云う

「サトイヌ」犬を云う、里犬の謂にて山犬の對へ云えるなり

を自身の結論としました。「これを見ると、「ヤマイヌ」とは狼のことであり、また山犬であることがわかる。そして「サトイヌ」とは犬のことであり、山犬に対する里犬であった」「狼は、里にいる犬に類似した山に生きる動物として認識されていたのである」とまとめています。

一見すっきりと結論が出たように思えますが、それまでいくつも積み上げてきた本草学者たちの「ヤマイヌとオオカミは別の動物だ」という文献は何の意味があったのでしょうか。

言葉による色の表現が実際にはどのような色を指すかははっきりしないところもありますが、菱川は本当の狼とは思えない毛色の動物もオオカミとして掬い上げています。

「夜明け前や夕刻、夜間といった日の光の乏しい時間帯で認識した色」かもしれない、「ゴマとは、夏毛と冬毛では微妙に色調が異なつて見える。季節の変わり目には毛が抜け落ちることもあって、見方によつては色の判別が難しいこともあるだろう。実際の毛色というよりは、人々によつて認識された毛色と考えるほうが妥当である。」とし、「季節や光の当たり具合によつて微妙に変化する狼の毛色が、人々の間でさまざまに伝承されてきたと理解すべきであろう」と、表現された毛色の違いは人の目の錯覚のせいにしてしまいました。これまで集めてきた文献は意味がないものになりました。

菱川が同書で収集し、分析した江戸時代の人々の認識は、多くはオオカミとヤマイヌは異なるというものでした。しかし現代の民俗学者菱川は、これを同じ動物であると結論づけました。日本の本草学は中国由来の解釈に影響された誤ったものであり、生物学が導入された明治時代にヤマイヌは即ちオオカミであったと判断したことが正しく。そして江戸時代の学者、庶民の見た毛並みの違いは光の加減や季節による錯覚だとしたのです。

その結論は正しいでしょうか。

### 三. 平岩米吉「狼―その生態と歴史―」

近現代の科学者、あるいは科学に近い人たちはどのように考えていたのかを探ります。在野のオオカミ研究者平岩米吉（一八九八〜一九八六）は著書「狼―その生態と歴史―」で「狼と山犬」という章を設けて、「一口でいえば、山犬は日本狼の別名、あるいは通称とするのが正しい」と述べていますが、その後が続く記述のなかで、山中にオオカミとは別の動物が

いたことを示唆する文献やエピソードをいくつか並べています。

中国の「豺狼」という言葉を輸入するにあたって平安時代から議論があり、江戸時代にはその区別を本草学者たちが論じあったことがありました。平岩が挙げたのは平野必大、貝原益軒、寺島良安といった本草学者らが豺狼の区別についてそれぞれ表明した意見です。

平野「豺狼相類し、ともに犬に似たり。而して狼は肥え、豺は痩せ、毛色亦殊なり、その健猛殊ならず」

貝原「豺(やまいぬ)はその形状狼に似て同じからず、其性甚悪しし、食うべからず。狼(おほかみ)は豺に似て異なれり、性よし、喰うべし。豺狼別物なり」

そして今でもニホンオオカミ信者がよくいう掌にみずかきがあるという形態上の鑑別法を平岩は「苦し紛れ」と一蹴した後、さらに混乱に拍車をかけるできごとが、「飼いだいが野生になり、山に棲むようになったものをも、通俗には漠然「山犬」と呼んだ」ことだといえます。

その事例として挙げたのが仙台の女学者、只野真葛の「奥州波奈志」(おうしゅうばなし)から以下のような話です。

「寛政のころ(一七八九〜一八〇〇年)奥州宮崎軍多田川村(現、宮城県加美町中新田)の二人の兄弟が、山狩に行くとき河原に一四、五頭の狼が集まっていたが、その毛色は赤毛、白毛、白黒の斑などであったというから、これは明らかに犬で狼ではない。しかし夜に入り帰路につく時、周囲の山谷で物凄く吠えるので、今度は「ただけしき憎き山犬めら」と叫んだという。」

つまり野生化した犬を狼とも山犬とも呼んでいたのである。」

「山犬」が何を指しているのかに関する平岩の解釈は

1. 狼を指す
2. 実際には存在しない狼に似た獣を指す
3. 山に棲む犬を指す

この三つを混同して使ってきたために混乱が生じたのだということです。そして今に至る「ヤマイヌ⇨オオカミ」という同一説は、シーボルトが「ファウナ・ヤポニカ」に記載したことが根拠になっているといえます。

平岩の三つの分類は明解です。本草学者が想像した架空の動物、山に棲む犬もオオカミと称され、オオカミもヤマイヌと呼ばれることがあったと。だからオオカミは一種だけと、実際にオオカミを飼って知っている人物らしい判断です。

#### 四、直良信夫と中村一恵の進化説

さらに科学的な判断をしようとした人たちがいました。日本史の研究者であるブレット・ウォーカーが「絶滅した日本のオオカミ」(北海道大学出版会二〇〇九)でよくまとめてくれているので、その記述を参照することにしましょう。

ウォーカーがオオカミについて取り上げたのは既にオオカミが日本からいなくなっ

まった後のニホンオオカミとヤマイヌに関する議論です。これは日本にいたオオカミがどのような動物だったかという疑問に端を発するもので、日本産オオカミが日本列島に隔離され、環境により小型化したとする自然進化説と、古代の犬との交雑が大陸のオオカミの形態を変え、雑種ヤマイヌとなり、やがて絶滅への道をたどったとする人為的進化説の二説があります。自然進化説の代表者として古生物学者である直良信夫（一九〇二〜一九八五）、人為的進化論説代表者は神奈川県立博物館の中村一恵（一九四〇〜）を挙げています。どちらの説も小型化の過程を説明することによってヤマイヌは日本で大陸のオオカミとは異なる動物に「進化」したのだと説明するものです。

## 五、シーボルトが送り出したニホンオオカミとヤマイヌ

平岩米吉が判断の根拠としたシーボルトの見解とはどのようなものでしょうか。シーボルトが江戸末期の日本からニホンオオカミの標本をヨーロッパに送ったことはよく知られた事実です。それがオランダのライデン博物館に展示され、日本産オオカミのタイプ標本だとされています。その経過に疑問があり、日本にいたオオカミの評価を混乱させています。

シーボルトは一八二八年に起きたシーボルト事件で日本を追放されますが、膨大な動物の標本をヨーロッパに送りました。ヤマイヌとオオカミを別種と考えていたのです。オオカミに関しては、ヤマイヌとオオカミの二種を送ったとされています。受け取ったライデン博物館の博物学者テミンクは、それを一種類の動物であり、ヤマイヌとも呼ばれるオオカミとは異なる独立種として分類し、日本の動物図鑑である「ファウナ・ヤポニカ」に記載してしまいました。このためヤマイヌがニホンオオカミの別称とされることになりましたが、当時は亜種という考え方はなく別の地域から報告されたものには別の種名が与えられた（小原巖）ためでもあり、その分類は現代から見れば適切ではありませんでした。

国立科学博物館に所属していた今泉吉典は一九七〇年に現地に赴き、実際に標本の鑑定を行っています。ライデンにはシーボルトの収集品である一つのはく製、二つの頭骨、および一つの頭骨つき全身骨格があり、はく製と頭骨の一つが同一個体であり、これがタイプ標本だとされています。全部で三個体分の頭骨を形態分類を得意とする今泉が鑑定し、一体をイヌと判断しました。このイヌの頭骨は大きく、秋田犬のオスほどの大きさであり、科学博物館の後輩である小原巖は「このような大きさの野生の犬と *Hodophilax* が混同されてヤマイヌと呼ばれたのであろう」と、寄稿した野外調査研究所報告<sup>5</sup> 『狼―伝承と科学』（二〇〇四）に書いています。

また近年になってニホンオオカミのDNA鑑定をテーマの一つとしている石黒直隆（岐阜大）がライデンの標本を調べています。DNA分析を通じてニホンオオカミの来歴を明らかにしようとしている研究の一環で、まだ最終的な論文はできあがっていないようですが、その過程でライデン博物館の頭骨の分析も行っていました。

（「ニホンオオカミとイヌとの交雑種？ いわゆるヤマイヌの存在を探る動物考古学的研究」）  
二〇一七〜二〇一九年の科研費を得ての研究ですので、最終報告を待ちたいところですが、

中間報告のような概要がありました。

#### 「研究実績の概要」

本研究の目的は、日本の動物史上、最大のミステリーであるシーボルトコレクションの「ヤマイヌ」が、実際にニホンオオカミなのか？あるいはオオカミと犬の交雑種なのか？を形態的解析と遺伝学的解析により解明することである。これまで、日本各地に保管されているニホンオオカミの骨とされる資料に関して形態的計測と遺伝学的解析を行ってきた。また、海外の博物館に保管されているニホンオオカミの骨資料についても同様に解析を行ってきた。平成三〇年度は、特に以下の成果を得ることができた。

1. オランダ・ライデン自然史博物館に保管されている三種類の頭骨（a、b、c）のミトコンドリアDNAを解析した結果、頭骨aはイヌの配列を示したが、頭骨bとcは、ニホンオオカミ特有の配列を示した。また、頭骨bとcについては、ミトコンドリアDNAのゲノム配列を決定した。
2. ドイツ・ベルリン自然史科学館のニホンオオカミの頭骨三点についてもミトコンドリアDNAの解析を行った。その内、二点についてニホンオオカミの特徴を有していることを明らかにした。」

ライデン博物館の頭骨の分析に関しては、三体中二体がニホンオオカミ特有の配列を示し、一体はイヌの配列であったと、今泉の形態分類と同じ結果を報告しています。

シーボルトはニホンオオカミとヤマイヌの二種の動物の標本を送り、今ライデンには三个体分の標本があります。そのうちの一個体分は形態上もDNA上もイヌだと鑑定されました。

つまりこの結果は、ヤマイヌと呼ばれたイヌが日本産狼と併せて日本から送り出されたであろうということの意味します。

#### 六. イヌをオオカミと誤認する可能性

さて前述のように、江戸時代の人たちはオオカミとヤマイヌに関して様々なことを書き残し、言い伝えてきましたが、シーボルトがヤマイヌとしてヨーロッパに送った動物はどうやら犬だったようです。それを現代の鑑定が示しています。

そうしてみると平岩米吉がヤマイヌの可能性の一つとして示した「山に棲む犬」という見方は、いいところを突いていてのではないのでしょうか。犬は人間の居住地だけでなく、山野にも生息していました。その事実をいろいろな人たちが補強してくれています。

歴史学者塚本学は「江戸時代人と動物」の中でこう書いています。

「飼育犬と野良犬とのな外側に、野犬という概念を設定してみたい。飼育状況からほぼ完全に逸脱した犬が、人の与える、ないし廃棄する以外の食糧を求めて生きる例は、十分考えられるからである。」

「一体ひとはどこで犬を狼と区別していたのであろうか。狼と家犬がかなり近縁の動物で

あつて、野生化した犬が狼と誤認される例は、江戸時代にも近代にもあつた。」と述べています。

柳田国男は、「狼と犬の区別が、少なくとも我が邦ではまだ明瞭に境目が立っていない」、「村の犬というのが四、五匹は常にいたが、犬を飼っている家は一軒もなかった」と町や村の犬には飼い主という概念がなく、ほぼ無主の犬だったということを明治期の自分の出身村の経験をもとに述べています。

柳田と同様地方の村落出身の直良信夫も自分の子ども時代のことを回想しています。彼は一九〇二年生まれですから、一九一〇年代、大正時代ごろのことでしょう。

「これらの野生犬の中には畜犬からはぐれてしまつて山野に籠つたものもあり、生まれつき野生化していたものもあつたことと思われる。私の子どもの時分、私の故郷の白杵地方の山野には、この種の野生犬が群棲していて、日暮れ方には屢々里へ出て人をいためたものだった」

山に「犬」が棲んでいることは明治大正頃までは人々の共通認識であつたと思われます。

歴史家の仁科邦男も述べているように「江戸時代から明治までは、犬は町や村で勝手に生きている生き物」だったので。

では実際にオオカミとイヌを誤認している事例を挙げましょう。

ニホンオオカミの絶滅史を研究したブレット・ウォーカーは前掲の「絶滅した日本のオオカミ」その歴史と生態学」で明治時代の北海道で繰り広げられた人間対オオカミの闘争を描いています。以下のような情報も収集しています。

「新冠の闘いはまるで常軌を逸していた。それはアメリカ西部のオオカミ被害について通書かれた状況よりもずっとひどいものだった。当時、日高地方には異常な数のオオカミや野犬が集まっていたようだ。」

「一八七八年六月二〇日、細川碧は札幌の開拓使本庁に、仔馬の被害はまだ続いていることを知らせる手紙を再び書いた。牧畜取り扱い人等はオオカミと野犬を牧草地から追い出そうとしたが、野獣たちは数百頭の群れでやってきて全く防ぎようがない」

「エゾオオカミは通常の状態では島中いたるところにいたが、それはオオカミの生態によって決まる分布の形であつた。」

しかし北海道のシカの数が一八八〇〜八一年に激減すると、オオカミはその活動領域を変えた。新冠で馬を殺したイヌ属の多くは実際は野放しのアイヌ犬（外観はオオカミに似ている）の可能性もあつた。開拓使の文書では、官吏は漢字の野犬や狼を事実上互換的に、ときには複合語（狼豺あるいは狼野犬という字）を用いた」

ウォーカーは北海道全体で獲殺された有害鳥獣の数を賞金の支給記録から確認しています。一八七八〜八一年の期間にオオカミ二九四頭に対し、野犬は五倍を超える一六七七頭が駆除されています。

新冠牧場ではウォーカーのいうように馬の被害が相次ぎました。その結果、オオカミは害

獣と認定され、アメリカと同様の手法で根絶にいたるわけですが、新冠牧場に殺到したというイヌ科動物は本当にオオカミだったのでしょか。現代で知られているオオカミの行動に照らしてみると、強固なナワバリを家族群で守るオオカミが集まって「異常な数」になり、「野犬」と一緒になって家畜を襲ったり、「数百頭の群れ」で移動するということはありえません。そして「実際は野放しのアイヌ犬（外観はオオカミに似ている）の可能性もあった」「官吏は漢字の野犬や狼を事実上互換的に、ときには複合語（狼豺あるいは狼野犬という字を用いた」とウォーカーは記しています。

また同じ北海道のオオカミ根絶に関して千葉徳爾（「オオカミはなぜ消えたか」）は、北大の犬飼哲夫の調査した資料をもとに論じていますが、この件に関してこのようなことも述べられています。

「知里真志保氏の「分類アイヌ語辞典」によればこの中には本州以南という山の犬、つまり野生化した犬の群れがかなり含まれていた可能性があるという」

こうした明治時代の事例を考慮するならば、人の手を離れて自然界に入り込んでいる野犬がいてオオカミと誤認されることは、江戸時代においてももちろんあっただろう、と考えるべきではないでしょうか。

## 七. 明らかになるヤマイヌの姿

菱川晶子が収集したような史料や伝承にある混沌の中から、様々な人が日本産狼の本当の姿を探り出そうとしてきました。

しかし、いずれの見方も現代の科学により否定されることになりました。

直良と中村の生物学的な推論に対しては石黒の分析結果がそれを否定しました。岐阜大の石黒直隆によるニホンオオカミのDNA分析結果は、日本にいた動物は大陸由来のハイロオオカミであり、かつ家犬との交雑の痕跡はないことを示し、頭骨サイズから推定した体サイズは小型ではあるもののごく普通のハイイロオオカミのサイズであることを示しました。（「絶滅した日本のオオカミの 遺伝的系統」二〇一二）

また島嶼化により孤立して小型化し、独自の進化を遂げたという直良の説は、日本列島の成り立ちに関する情報が十分でなかった時代の産物と言ってもいいかもしれませんが。日本列島が大陸から分離したのはおよそ一万年前であり、それ以前は大陸の一部でした。島嶼化により大型哺乳類が独自の進化を遂げるには短すぎる時間です。またオオカミの獲物であるニホンジカやイノシシは日本と同様に大陸にも分布していますが別の種とはされています。にも関わらず、それよりもはるかに移動能力もあり、移動の習性もある（群れから独立する若いオオカミが配偶者と新たなナワバリを求めて一〇〇〇キロも移動することが観察されています）オオカミだけが隔離されて独自進化をすることは考えられません。

もちろん一万年も経過すれば日本人の体格が栄養状態の改善で、一〇〇年で驚くほど変化したように、獲物動物の大きさに合わせて体サイズが小型化することはありますが、それ

はDNAの変化ではありません。

菱川の民俗学的方法論は、確かに従来の曖昧模糊としたオオカミ観をはっきりと像を結ぶものにしてくれました。それは賞賛に値します。しかし彼女もヤマイヌという別の種は日本の山野に存在しないという先入観に縛られています。彼女はいくつもの例を挙げながら、江戸時代の本草学者のオオカミとヤマイヌの区分は「中国の本草学の影響」と退け、民間の様々な毛色に関する伝承は「夕方の日の光」や「毛が抜け替わる時期の毛色」によってそう見えたのだろうと見間違いを強調したうえで明治期の地誌を根拠としました。事実や事例をたくさん並べてはみたものの、そこからは自分の望む仮説は導き出せず、最後に提示した「新常陸国誌」の記述に飛びついたのは、既に彼女の中に大前提があったためでしょう。残念ながらその結論には飛躍があります。

鎌倉室町時代には確かに「ヤマイヌはオオカミである」との記述がありました。江戸時代に大きく変化します。菱川の言う二層化どころか上層も下層もこぞって「ヤマイヌはオオカミではない」と言っています。

なぜ江戸時代にこれほど見方が大きく変化したのでしょうか。

#### 八、江戸時代の大変動後にヤマイヌがいた

私はこの時代に起きた大変動により自然界が大きく変化したと考えています。室町から江戸時代にかけて日本列島には人口増加という大きな変化がありました。一六〇〇年から一七五〇年にかけて人口が二・五倍になり、その人口を養うために森林が開かれて耕地が倍増し、耕地を豊かにするために草地在り増えました。人間の居住地も山の奥へ奥へと広がり続けたのがこの時代です。

人間が進出した地域に、「イヌ」も増加し生息地を広げます。イヌは人間社会が拡大するにつれて増加し、人間領域からはみ出すイヌも増え、山野に野犬の生息エリアができたことが考えられます。江戸期は鎖国というイメージがありますが、海外の事物はさかんに持ち込まれ、大型の洋犬も輸入されていることが絵画に描かれています。

民俗学者、地理学者である千葉徳爾（一九一六～二〇〇一年）は、オオカミの生息地に関して会津藩の動物等の所在を記した文書を基に「狼は奥山には生息していない。山麓の平地に極めて隣接した山林がその常住の場所である」という見解を「オオカミはなぜ消えたか」という著書で披露しています。その解釈は宮城県歴史博物館の村上二馬に引用され、南部藩や津軽藩でヤマイヌ即ちニホンオオカミが人を襲った事件の背景とされてしまいました。ニホンオオカミは人間の居住地周辺に棲んでいたため、人間との衝突が起きやすかったのだということです。

オオカミの生息地に関する千葉の解釈はハイイロオオカミの研究を積み重ねてきた現代の科学から見てまったくの間違いであると断言できます。ハイイロオオカミが人間の周辺にも生息することは確かですが、「奥山には生息しない」とは、人間に依存せず、広大なナワバリとそこに含まれる獲物、すなわちシカやイノシシなどの有蹄類を必要とする野生動

物としてはありえないことです。しかし人間の生活に依存する野化犬の広がりを示すものだったと考えればそれなりの整合性をもつと考えられます。

ヤマイヌ、オオイヌなど〇〇イヌという呼び方に地域的な偏りがあるのも、理由がありそうです。オオイヌという呼称は東北に多く、信州にはヤマイヌという呼称が多いと菱川は述べていますが、その二地域には馬の産地だという点で類似性があります。南部藩はもちろん南部駒で全国から引つ張りだこの産地ですが、信州も武田騎馬軍団の故地であり、八ヶ岳山麓には馬が多く飼育されていました。高島藩東部の八ヶ岳山麓では馬が多く農耕に使われていたと記録にはあります。馬の生産にはオオカミの被害がつき物であり、南部藩が米沢藩からの馬の生産に関する問い合わせに「狼害を防ぐこと」を挙げているほど、馬の生産にはまづはオオカミ退治という認識が共有されていました

オオカミ退治の結果、周辺にはナワバリ性の動物であるオオカミは少なくなり、人間の居住地拡大とともに犬が空白を埋めて増加し、野化犬が増えたのだとしたら・・・

東北のオオイヌ、加賀のオオイヌ、信州のヤマイヌ、という呼称の違いも人々がその動物を犬と考えていた可能性を示す状況証拠です。

江戸時代に広がった人間の居住地の外縁、オオカミエリアの内側にヤマイヌ、つまり野犬の生息エリアがあったのです。そのためオオカミに似た動物ヤマイヌの目撃機会も増え、トラブルも頻発するようになりました。ヤマイヌは想像上の動物でも、ドールのようなイヌ科動物でも、オオカミとの交雑でもなく、「犬」だったことを、多くのことが指し示しています。

この考察は、江戸時代に頻発したオオカミによるとされている事件の謎を解くカギでもあります。

(二〇二二年二月二日記)

#### 【参考文献・論文】

- ブレット・ウォーカー「絶滅した日本のオオカミ」北海道大学出版会 2009
- 菱川晶子 「狼の民俗学 人獣交渉史の研究」東京大学出版会 2009
- 平岩米吉は著書「狼―その生態と歴史―」築地書館〔新装版〕 1992
- 塚本学 「江戸時代人と動物」日本エディタースクール出版部 1995
- 直良信夫 「全集 日本動物誌21」講談社 1984
- 千葉徳爾 「オオカミはなぜ消えたか―日本人と獣の話」 新人物往来社 1995
- 石黒直隆 「絶滅した日本のオオカミの 遺伝的系統」二〇一一